

英語を主専攻としない学生が感じる英語使用への不安
と目標言語接触量の関連性：
オンライン英会話レッスンを通じての予備的研究

THE RELATIONSHIP BETWEEN NON-ENGLISH MAJOR STUDENTS' ANXIETY IN USING ENGLISH AND THE FREQUENT CONTACT WITH THE TARGET LANGUAGE :
A PILOT STUDY THROUGH ON-LINE ENGLISH CONVERSATION LESSONS

吉野千乃

YOSHINO Chino

キーワード：外国語不安、言語接触、オンラインレッスン

Key words : Foreign Language Anxiety, Language Contact, On-line Lessons

要 旨

コミュニケーション能力の育成が重視される傾向にある近年の英語教育だが、教室内外で英語を使用することに強い不安を感じる学習者が少なくないことも指摘されている。本研究では、オンラインで行う目標言語話者との会話レッスンを通して、目標言語との接触量が英語を主専攻としない学生の感じる不安にどのような影響をもたらすか検証を行った。その結果、オンラインレッスンを受講した学習者たちは、受講しない群と比較してレッスン前から不安度が低い傾向にあったが、レッスン後にはさらに不安度を軽減させていたことが明らかとなった。

1. 研究の背景と目的

2013年に高等学校等の新学習指導要領が施行されて以来、日本の英語教育では、「コミュニケーション能力の育成」が重視されており、さらに多くの学習者から「英語を使って外国人とコミュニケーションが取れるようになりたい」、「英語で最低限の会話ができるようになりたい」といった要望が上がっている。英語学習についてのニーズ分析 (needs analysis) を調査した大木 (2015) や、松崎 (2015) などでも「英会話のスキル」、「コミュニケーション力」など、いわゆる実践的コミュニケーション能力を身につけたいとしている学習者が非常に多いという結果が明らかになっている [1, 2]。しかしその一方で、教室内であっても英語を使うことに不安を覚え、コミュニケーションに消極的である学習者の存在も決して少なくないことも指摘されている。

外国語に対して、学習者が感じる不安 (anxiety) は学習の成果を大きく左右する一つの情意要因であるという考えは、これまで多くの研究者によって指摘されている。この不安に関しては、(1) コミュニケーション不安 (communication apprehension)、(2) 周りからの否定的な評価への恐れ (fear of negative social evaluation)、(3) テストに対する不安 (test anxiety) の3点が主なものであると MacIntyre & Gardner (1989) によって挙げられている [3]。

これらの不安は、個人によって程度の差はあれど、外国語を使用する際に多くの者が感じるものであることが想像できるが、教師は学習者の心理に配慮し、彼らが過度な不安を覚えることなく学べる環境を提供する必要がある。近年では、学習者の不安を緩和する教授法なども報告されている (八島, 2019) [4] が、目標言語のコミュニティや、その言語話者とどの程度の接触があるかという「言語接触量」が不安の度合いに大きく影響すると示唆している先行研究もある (Clément, Dörnyei & Noels, 1994) [5]。すなわち、目標言語が使用されている環境に身を置くなどして、言語

に接触する時間が増えてくれば、それに連れて不安が減少するという考え方である。

本研究では、この考えに基づき、半期に渡りオンラインで目標言語話者の講師と会話レッスンを行った学習者が感じる英語使用への不安は、レッスンを行う前後でどのように変化したのかについて検証を行っていく。

英語を主専攻としない日本の学生にとって、目標言語話者との日常的な関わりは稀有であることが多い。そのような環境下では、オンライン上であっても目標言語話者との接触が大きな意味を持つものであると考えられる。また、新型コロナウイルス感染症拡大により、海外留学や海外旅行が困難となった生活様式において、オンラインでの会話レッスンが大学の授業の中で行われる意義についても検討することも目的としたい。

2. 先行研究

外国語学習において、不安や動機などの情意要因が学習達成度に影響していることはよく知られているが、不安は外国語学習の成功と最も強い負の相関を示すものとされている (MacIntyre & Gardner, 1989) [3]。また、学習者が外国語で話すときに経験する不安やストレスのために、その能力を十分に反映させることができないことも指摘されている (Horwitz, Horwitz, & Cope, 1986) [6]。

学習者が目標言語を用いてコミュニケーションしようとする意欲 (Willingness to Communicate / WTC) には、学習者の感じる不安と、自己の言語能力をどのように認知しているかという2つの要因が大きく影響していると MacIntyre & Charos (1996) で指摘されている [7]。この研究では、学習者が不安を軽減し、自己の言語能力を正しく認知できれば、適切な自信をもってコミュニケーションを行うことが出来るようになることが示唆されている。

言語接触と学習者の不安の関連を検証した Yashima, et al. (2004) では、高校生を対象として1年間の留学前後の WTC、不安、動機を調査

し、WTC が低く、英語に自信がない生徒は不安も高いことを明らかにした。また、WTC の高まった生徒はコミュニケーション量と頻度も高くなるという相関関係が見られたが、留学初期の調査ではコミュニケーション量が少なかったことから相関関係が見られなかった[8]。

Aida (1994) では、アメリカの大学で日本語のクラスを受講している学生を対象に、彼らを感じる不安の度合いを言語コミュニティとの関わりから調査した。結果として、目標言語圏の人々と文化との接触量が多い者ほど不安が少ないことが明らかになった。しかしながら、中には接触量が比較的多いにも関わらずコミュニケーションに不安を感じ続けている学習者もあり、個人差が大きいことも指摘されている[9]。

Ohata (2005) は、アメリカの大学で英語を学ぶ5人の日本人学生にインタビューを行い、彼らが目標言語に日常的に接しているにも関わらず不安を感じるのは、日本的な文化・習慣による影響が1つの要因であると結論づけている。この研究では各々の専攻や生活状況によって、英語の使用割合に個人差が大きいことも指摘されている[10]。

飯村 (2016) では日本の大学1年生を対象に、英語母語話者と、日本語母語話者の教師による授業を1年間受けた場合の不安程度を、目標言語話者との接触量という観点から検証した。その結果、英語母語話者の授業を受けていた学習者の方が不安度がより低いことが分かった。この研究では対象となる学生の専攻は様々であり、1年間の授業回数や、実際に学習者各自が受講した時間数などは明らかにされていないが、目標言語話者との接触量が多いほど不安が低くなっているということが明らかとなった[11]。

奥村 (2010) は、約1か月間の海外語学研修に参加する大学生を対象に、研修の前後に不安度が変化しているかを検証した。その結果、8名中6名が不安を減少させていることが分かった。この研究において、最も大きく軽減した項目の一つは「間違いを恐れること」への不安であり、参加者のコメントには「(研修を経験してから) 英語をしゃ

べるのが怖くなくなった」との声があった[12]。

3. 本研究

本研究では、英語を主専攻としない短期大学生が感じている英語使用への不安は、オンライン英会話レッスンという目的言語話者との接触を通じて変化するのか、また変化するとしたら、それはどのようなものであるのかについて明らかにすることを目的とする。

研究課題は以下のとおりである。

- (1)英語を主専攻としない短期大学生がオンライン英会話を半期受講する前後で、英語使用に対する不安度には変化が生じるか。
- (2)上記(1)で変化が生じていた場合、それはどのような変化であるか。
- (3)オンライン英会話を受講した学習者(実験群)と、受講しない学習者(対照群)間には、不安に対しての有意な差が見られるか。
- (4)上記(3)で有意差が生じていた場合、それはレッスン受講の前後で変化するか。

3.1 オンライン英会話

筆者の担当している観光ビジネス学科1年次の選択科目「英会話基礎」全15回のうち10回では、履修者は筆者による講義に加え、外部の外国人講師と1対1でのオンラインレッスンを受講することとなっている。民間の英会話サービス提供会社と契約を締結し、学生1人当たりが半期に約25～30分のレッスンを10回受講する形式である。昨年度までは、全履修者がキャンパス内の情報処理室にてデスクトップ・コンピュータでヘッドセットとWebカメラを用い、同時にレッスンを受講していたが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、1教室に多くの履修者が集合した状態で発話を行うという形での実施は不可能であった。そこで、今回は初の取り組みとして、履修者各自がスマートフォンやタブレット端末を用い、自宅等からWeb会議システムZoomを用いてレッスンを受講するという方法で行うこととした。

履修者には初回授業の際に、レッスン受講のた

めのアカウント作成やレッスン予約方法等のガイドランスを実施し、授業終了後1週間以内にトライアルレッスンを完了させるよう指示を出した。トライアルレッスンを問題なく終了させたことが確認できた履修者は、その後は週1回、25分間の英会話レッスンを各自で予約し、継続して10回受講するという運びであった。英会話サービス提供会社のサポートデスクからは、週に1度、全履修者の受講状況が筆者に送信されてきた。また、履修者には毎回のレッスン終了後に簡単な記録をWeb上に提出させていたため、各自の進捗度の確認を随時行うことが出来た。

3.2 研究方法

本調査は本研究倫理審査委員会承認のうえで実施した。はじめに事前調査として、選択科目「英会話基礎」授業を履修し、Zoomを利用した目標言語話者とのオンライン英会話を25分×10回にわたり受講する学習者(実験群)と、上記科目を履修せず、オンライン英会話を経験しない学習者(対照群)に、教室内外での英語使用について不安を感じているかどうかアンケートを行い、中間値を廃した6件尺度方式で回答してもらった。

本来であれば、実験群は「英会話基礎」の全履修者24名が対象となるはずであったが、全10回というレッスンの規定回数を満たせなかったものが7名いたため、今回の事前調査、事後調査のデータからは削除することとした。したがって実験群の人数は17名(N=17)となる。オンライン英会話を受講しない対照群は、事前調査、事後調査双方に回答した25名(N=25)である。

回答の収集にはGoogle Formsを利用し、本研究の意図目的を正しく理解し、協力を承諾してくれた者のみを対象とした。なお、対象者は個人が特定できないよう匿名化のうえ、ナンバリングを行い分析を行った。

今回使用した質問項目は先行研究のYashima, et al. (2009) で使用されていた外国語教室不安尺度 Foreign Language Classroom Anxiety Scale (FLCAS) [13] を、本研究の目的に沿い-

部改訂したものである(資料)。

事前調査では、オンライン英会話を受講する、または、しないこととした理由についても自由記述式で任意回答してもらった。こちらの内容からも、学習者が持つ英語使用への不安度が読み取れるかどうか検証するためである。

事後調査として、オンライン英会話全10回の受講が終了したのちに、実験群、対照群のそれぞれに対し、事前調査と同内容の質問に回答を依頼した。さらに、実験群には、オンラインレッスン受講を経験しての感想なども自由記述形式で答えてもらった。これは、オンライン英会話を受講した学習者がレッスンに対してどのような意識を持っているのかを検討し、海外への渡航が難しい現状において、大学の授業の中でオンライン英会話を実施することによってどのような意義があるのか検討を行うためである。

3.3 結果と分析

まず、各質問項目に対する回答「①全くそう思わない」から「⑥とてもそう思う」をそれぞれ数値の1-6に置き換え、「6」が最も高い不安を表す「不安得点」とした。全回答者の不安得点は、最も低い場合で1点×アンケート全33問で33点、最も高い場合は6点×33問で198点の間に配されることとなる。

はじめに、研究課題(1)について明らかにするために、実験群の事前調査、事後調査のデータについて対応のあるt検定を行った。分析には統計処理ソフトjs-STARとEXCELを使用した。

表1 実験群の事前調査と事後調査(対応のあるt検定)

	実験群 事前	実験群 事後
平均	125.9411765	98.35294118
分散	1040.058824	911.6176471
観測数	17	17
ピアソン相関	0.481807643	
仮説平均との差異	0	
自由度	16	
t	3.573236104	
P(T ≤ t)片側	0.001269389	
t境界値片側	1.745883676	
P(T ≤ t)両側	0.002538778	
t境界値両側	2.119905299	

上記の結果より、事前調査と事後調査の不安得点平均には、有意差があることが明らかとなった ($t(16) = 3.573, p < 0.5$)。オンライン英会話を全10回受講した学習者の中では、英語使用への不安度が受講後に大きく減少したことが明らかに見て取れる。これは先行研究で示されていた、言語接触度が高まれば学習者の不安は減少する、という仮説を支持する結果となるものだろう。事後調査におけるレッスンへの感想からも、その一端がうかがえる。以下に回答から一部を抜粋する（下線は筆者による）。

「一対一で英語で話す機会が今までなかったので、とても貴重な経験をすることができて英語で話すことに少し自信ができました。」

「自分の英語が相手に伝わっていたし、話も盛り上がったので、意外と自分は英語で話せるのかな？と思った。少し自信になった。」

「始める前は自分の英語力に全く自信がなく、間違ったらどうしようなどと思っていましたが、始めてみたら自分なりに英語を話してみたりすることで自分の英語に少し自信が持てるようになりました。」

「最初は緊張していて何を話していたのか全然覚えていないのですが、回数を重ねるごとに英語も聞き取りやすくなり、話すことが楽しくなりました。」

「最初はちゃんと会話が成立するか不安でしたが回数を重ねるごとに慣れ最後には楽しく会話をすることが出来ました。」

上記の感想からも、「はじめは不安だった」が徐々に「慣れて」、最終的には「少し自信がついた」と感じていた学習者が存在していたことが裏付けられている。

また、不安得点に上昇（124点→153点）が見られた履修者も1名のみ見受けられたが、不安が増大したというコメントを残してはなかった。

以上の結果より、研究課題(1)として設定した、オンライン英会話を半期受講する前後で、英語使

用に対する不安度には変化が生じるか、という問いに対しては明らかな変化が生じており、それはどのような変化であるか、という研究課題(2)に対しては、不安得点の減少が見られたことより、言語接触度の増加によって学習者の感じる英語使用への不安が減少された、という結果を得ることができた。

次に、研究課題(3)を検証するため、実験群と対照群間の不安得点についても比較を行った。はじめにオンラインレッスン受講開始前の不安度の比較について記述する。

表2 事前調査における実験群と対照群の比較
(対応の無い t 検定)

	実験群 事前	実験群 事後
平均	125.9411765	152.4
分散	1040.058824	847.8333333
観測数	17	25
プールされた分散	924.7235294	
仮説平均との差異	0	
自由度	40	
t	-2.767798027	
P(T ≤ t)片側	0.004253916	
t 境界値片側	1.683851013	
P(T ≤ t)両側	0.008507831	
t 境界値両側	2.02107539	

上記結果より、「2つの標本の平均が同じである」という帰無仮説は拒否され、実験群と対照群の間の不安得点平均には、そもそもオンラインレッスン受講前から明確な差異が生じていることが分かった ($t(40) = 2.767, p < 0.5$)。実験群は対照群に比較すると、はじめから不安得点が有意に低い傾向があり、レッスンの受講を通してさらに不安を軽減させていったことが分かる。さらに、事前調査時に表れていた不安度の違いが、レッスンの受講を決定づける行動に大きく影響していた可能性を示すために、オンラインレッスンを受講する、またはしない、とした理由の自由記述回答から、以下にいくつか引用する（下線は筆者による）。

<実験群>

「英語を怖がらずに積極的に使えるようになりたいから。」

「英語を話すことが苦手なため、少しでも慣れる

ようにするため。』

「常に外国人と喋らないと、英会話能力が上がらないから。」

いうまでもなく、純粹に「英会話の練習をした
いから」、「英語を勉強したいから」という回答が
多くを占めていたが、上で引用したように、実験
群の中には、自身の英語への不安を認識しつつ、
それをレッスン受講という目標言語話者との接触
経験を通して軽減していこうという姿勢を持つ者
がいたことが読み取れる。無論、当該科目は選択
履修であるため、そもそも英語に比較的高い動機
づけを持つ者が多い傾向にあったことも予想され
るが、こういった積極的な意識でレッスンに取り
組もうとしていた履修者がいたことは特筆すべ
き点である。

次に、対照群によるコメントもいくつか引用す
る（下線は筆者による）。

<対照群>

「英語が苦手でやることに対して不安しかなか
たから。」

「英語を話すことに自信が無いから。」

「英語が苦手で不安。外国人と話す機会がない
ので受けなくてもいいと思った。」

上記の通り、英語に苦手意識がある、というこ
とが前提となっており、特に「英語で話すこと」
に自信がない、不安であるために履修しないこと
とした、というような記述が目立った。これは実
験群の中に見られた、不安を持ちながら、それを
自らの意志で軽減していこうという姿勢とはまさ
に対照的である。「不安しかない」という率直な
表現は、教科としての英語に苦手意識のある学習
者にとって、目標言語話者との1対1の対話とい
う活動が心理的に大きな負担となっていることが
読み取れる回答である。また、以下のようにオン
ラインレッスン自体への不安をにじませている記
述も見られた。

「外国の人とオンラインを通じてコミュニケーション
を取るとするのが不安だから。」

物理的な「対面」での授業とは異なり、オンラ
インを介して、さらに外国語を用いてコミュニケー
ションをとる、という、学習者にとって不慣れな
(場合によっては初の)経験に、不安を禁じ得ない
者がいることはごく当然と思われる。遠隔授業の
受講経験があったとしても、オンラインで外国語
を学ぶ、という特殊な環境は学習者の不安を増大
させる可能性があることを、教師は考慮すべきで
あるといえよう。

次に、レッスン終了後の実験群、対照群の不安
得点比較について記述する。

表3 事後調査における実験群と対照群の比較
(対応の無い t 検定)

	実験群 事前	実験群 事後
平均	98.35294118	162.08
分散	911.6176471	805.91
観測数	17	25
プールされた分散	848.1930588	
仮説平均との差異	0	
自由度	40	
t	-6.960594562	
$P(T \leq t)$ 片側	1.06403E-08	
t 境界値片側	1.683851013	
$P(T \leq t)$ 両側	2.12805E-08	
t 境界値両側	2.02107539	

こちらにも実験群と対照群の不安得点平均には有
意差が認められた($t(40)=6.960, p<0.5$)。した
がって研究課題(3)のオンライン英会話を受講した
学習者(実験群)と、受講しない学習者(対照群)
間には、不安に対しての有意な差が見られるか、
という問いについては、有意差が見受けられたと
回答することができる。また、有意差が見受けら
れた場合、それはレッスン受講前後で変化してい
るかを問う研究課題(4)については、前述の通り、
実験群と対照群の不安得点平均は、事前、事後調
査ともに有意な差が生じており、レッスンの前後
を通して実験群よりも対照群の不安得点平均は有
意に高いままであった。このことから、オンラ
インレッスンが学習者の不安度を低下させるのに
有効であったことがうかがえる。

4. 考 察

以上、結果の通り、オンラインレッスンを全10回受講した学習者は、英語使用への不安得点を減少させていたことが明らかとなった。これはレッスンを受講しなかった対照群との比較や、実験群の学習者のコメントからも読み取れるように、レッスンを通して得られた目標言語話者との接触が大きな役割を果たしていたといえる。

今年度は初の試みであった Zoom を使用してのレッスン受講という形式であったため、既定の回数のレッスンを完了できなかった学習者が存在していたが、言語接触量の影響をさらに検証するためには、学習者各自の具体的な受講時間と不安度の相関を検証していく必要があると考えられる。また、対照群の中には、英語への苦手意識から、どうしても不安が高く、「話す」といった英語活動に大きな抵抗感を抱いている者がいたことも明らかとなった。このような学習者は、日本の教育環境下で決して少数ではないことも予想できる。しかしながら、今回得られた結果のように、オンラインレッスンを受講したことで不安度を軽減させることが出来た学習者がいた事実を示していくことで、不安度の高い学習者の英語への動機づけをわずかながらでも高められるのではないかと期待する。

5. 終わりに

今回の結果は、学習者の英語能力伸長に直接関連付けられるものではないが、学習者の英語への不安を少しでも緩和していくために、目標言語話者との接触が果たす役割の大きさをあらためて示唆出来たといえる。現在のように、海外旅行や留学の難しい環境下では、オンライン上であっても、目標言語話者と直接対話ができるプログラムは有効であることが確認できた。今後は、学習者がどのような場面でどの程度の不安を感じ、それはどの程度の言語接触量を持って軽減できるものなのか、より具体的な検証が必要であると考えられる。

4年制大学より修業年限が短い短期大学では、学びの成果をスコアや検定試験の合否にのみ求めてしまいがちである。しかし、外国語を学ぶ意義は、それまでと異なる視点で物事を眺められるようになることや、ことばを通じてより広い世界で他者と関わっていけるようになることにもある。その素晴らしさを学習者に伝えるためにも、学習者の感じている英語への不安を軽減させることが重要である。「コミュニケーション能力の育成」の名の下、教師が学習者の不安を必要以上に増大させないよう英語学習支援を行うためにはどうすべきなのか、さらなる検討を重ねていきたい。

資料：質問項目

以下の質問について、現在のあなたの状況に最も当てはまる答えを 【①全くそう思わない、②そう思わない、③どちらかというそう思わない、④どちらかというと思う、⑤そう思う、⑥とてもそう思う】 から1つ選んでください。

- 1) 英語で話すときに自信がもてない。
- 2) 英語を使うときに、何か間違ってしまうのか気になる。
- 3) 英語の授業で当てられると思うと緊張する。
- 4) 英語で話すとき、相手の言っていることが理解できないととても不安だ。
- 5) もっと英語の授業が少ないと良いと思っている。
- 6) 英語の時間授業中、関係のないことを考えていることがよくある。
- 7) 他の学生の方が自分よりよくできている。
- 8) 英語のテストではだいたい緊張してしまう。
- 9) 英語で準備なしに話さないといけない時、パニックになる。
- 10) アルバイトなどで英語しか話せない人と接しなくてはならない時、パニックになる。
- 11) 英語を使うときに動揺する人の気持ちがわかる。
- 12) 英語を使うとき、緊張のあまり知っていたことも忘れてしまうときがある。

- 13) 英語の授業で、自分からすすんで答えるのは恥ずかしい。
- 14) 英語でネイティブ・スピーカーと話すときは緊張する。
- 15) 英語でノンネイティブ・スピーカー（日本人など）と話すときは緊張する。
- 16) 授業の予習を十分にしているにもかかわらず心配になる。
- 17) よく英語の授業を休みたくなる。
- 18) 英語の文を読んだり書いたりするとき、翻訳アプリなどを使わないと不安になる。
- 19) 英語を話したり書いたりするとき、先生が自分の間違いをいちいち直しそうなので心配だ。
- 20) 英語で友達とロールプレイをすることは緊張する。
- 21) 英語のテスト勉強をすればするほど混乱してしまう。
- 22) テキストやインターネットなどで英語の文を読むとき、内容が正しく理解できているか不安になる。
- 23) 英語の授業についていけるかどうか心配である。
- 24) 英語で文章を書くとき、とても不安になる。
- 25) 英語の動画を見るときに内容が理解できるか不安になる。
- 26) 英語のリスニングをするとき、内容が理解できるか不安になる。
- 27) アルバイトや将来の仕事で、英語を使うことを想像すると不安になる。
- 28) 英語を話すためには、たくさんの文法規則を勉強しないといけないので圧倒される。
- 29) 発音に自信がなく、私が英語を話すと他の学生が笑うのではないかと思う。
- 30) ネイティブ・スピーカーに会うとき、おそらくリラックスできないと思う。
- 31) 日本人が英語で話しているのを聴くと、劣等感を覚える。
- 32) ネイティブ・スピーカーの英語授業を受けることは緊張する。
- 33) 日本人の教師の英語授業を受けることは緊張する。

参考文献

- [1] 大木俊英 (2015) 「テキストマイニングを用いた高校生英語学習者のニーズ分析：大学受験予定者と非予定者の比較」『白鷗大学論集』第29巻, pp.193-216.
- [2] カレイラ松崎順子 (2015) 「社会科学系の大学生, 教員, および卒業生を対象にした英語学習に関するニーズ分析」『東京経済大学人文自然科学論集』第136号, pp.45-61.
<http://hdl.handle.net/11150/794>
- [3] MacIntyre, P. & Gardner, R. (1989). Anxiety and Second Language Learning; Toward a theoretical clarification. *Language Learning*, 39, 2, 251-275.
- [4] 八島智子 (2019) 『外国語学習とコミュニケーションの心理』大阪：関西大学出版部
- [5] Clement, R., Dornyei, Z., & Noel, K.A. (1994). Motivation, Self-Confidence, and Group Cohesion in the Foreign Language Acquisition. *Language Learning*, 44, 417-448.
- [6] Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. (1986). Foreign Language Classroom Anxiety. *The Modern Language Journal*, 70, 2, 125-132.
- [7] MacIntyre, P. & Charos, C. (1996). Personality, Attitudes, and Affect as Predictors of Second Language Communication. *Journal of Language and Social Psychology*, 15, 1, 3-26.
- [8] Yashima, T. Senuk-Nishida, L., & Shimizu, K. (2004). The Influence of Attitudes and Affect on Willing to Communicate and Second Language Communication. *Language Learning*, 54, 119-152.
- [9] Aida, Y. (1994). Examination of Horwitz, Horwitz, and Cope's Construct of Foreign Language Anxiety: The Case of Students of Japanese. *The Modern*

Language Journal, 78, 155-168.

- [10] Ohata, K. (2005). Potential Sources of Anxiety for Japanese Learners of English. Preliminary Case Interviews with Five Japanese College Students in the U.S. *TESL-EJ*, 9, 3. 1-21.
- [11] 飯村文香 (2016) 「外国語を学習する日本人学習者の不安と目標言語話者との接触量の影響」『中部地区英語教育学会紀要』第45巻, pp.31-36.
- [12] 奥村玲香 (2010) 「短期語学研修に参加する日本人学生の不安の理解--特性不安と外国語不安」『帝塚山大学心理福祉学部紀要』第6巻, pp.35-48.
- [13] Yashima, T., Noels, K.A., Shizuka, T., Takeuchi, O., Yamane, S, & Yoshizawa, K. (2009). The Interplay of Classroom Anxiety, Intrinsic Motivation, and Gender in the Japanese EFL Context. *Journal of Foreign Language Education Research*, 17, 41-64.